

ellipse

[エリプス]

TOPICS

思いを紡ぐ

～ラオスから日本、そして、日本からラオスへ～
～チャンタソン・インタヴォンさんの教育への思い～

楕円(ellipse)には焦点がふたつあります。男性中心の社会から、女性と男性がそれぞれに中心(焦点)となる社会を目指すという思いを込めて、誌名を「エリプス」と名づけました。



ワ・タ・シ

深津知寿 FUKATSU, Chizu イラストレーター
東京生まれ。1988年、お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業。在学中に、『週刊朝日』誌上にて「山藤章二の似顔絵塾」特待生となる。広告代理店勤務を経て、1990年より作家活動を開始。書籍装画、CDジャケットなど多く手がける一方、エッセイ執筆、壁画制作などの活動を展開している。



特定非営利活動法人
お茶の水学術事業会

REPORT

科学史散歩 9

「女性数学者の草分け 森本治枝」

INFORMATION

イベント情報

事務局よりお知らせ

思いを紡ぐ

～ラオスから日本、そして、日本からラオスへ～

ーチャントソン・インタヴォンさんの教育への思いー



チャントソン・インタヴォンさんは、1974年に日本の文部省の留学生としてラオスから日本にやってきました。日本での学生時代に生涯の伴侶と出会い、結婚、出産。一方で初志貫徹、学問の道を極め、自身の信念を絶やさず歩んできたお茶大OGのひとりです。お茶大の研究生時代には、「ラオスのこども」（1982年～現在はNPO）を立ち上げ、その10年後には「ラオスの女性とともに仕事をつくる会」（1991年～）を設立し、着実に支援の輪を広げ、活動を続けて来ました。今では、ラオスの人々が自立して運営し、活動を続けられるようになりつつあります。今回は、お茶大での思い出を交えてチャントソンさんのこれまでの活動を振り返り、今後の夢について伺いました。

と、わたしの背中を押してくれ、日本へ行くことを決めたのです。日本に来てからの1年間は、東京外国語大学付属の日本語学校で学びました。日本の教育の普及ぶりなどを見るうちに、日本語だけではなく、やはり教育学を学びたいという気持ちが強くなってきました。そこで、当時お世話になっていたYWCAのお母さん方や留学生の先輩たちの後押しもあり、わたしと同じく日本語を学ぶためという名目で日本に来た7人の留学生たちと一緒に、当時の永井道雄文部大臣に宛てて、「自分の国の発展に役に立つ学問を学ばせて欲しい」と手紙を書きました。この手紙を送ったことで、わたしたちとその後に来る留学生は、自分の学びたいことを学べるようになったのです。日本で学んだことを、祖国と日本の友好のため、そして、祖国のために役立てたいというわたしたちの気持ちが通じたのですから、とても嬉しかったです。留学生の後輩たちも、きっとわたしたちに感謝しているのではないのでしょうか。

🌀 学びたいことを学ぶために 🌀

日本には、日本の文部省からの奨学金をもらって来ましたが、正直来る前には迷いました。ラオスの学校ではフランス語と英語を学んだため、フランス語を生かしてフランスへ留学したいと考えることはありましたが、日本へ行くことは全く考えていませんでした。また、この奨学金は日本語を学ぶためのものだったので、医学か教育学を勉強したいと思っていたわたしは、そのことでも迷いました。でも、家族や周囲の人のすすめもありましたし、何より、わたしを可愛がってくれた近所の韓国人のおじさんが、「日本はいいよ。」



写真1 卒業式にて韓国の留学生と

🌀 大山寮時代とラオスへの思い 🌀

お茶大では、学部から修士までと1年間の研究生生活を送り、教育行政について学びました。わたしは大山寮で3年間を過ごしましたが、4人部屋に留学生はわたしひとり、3人は日本人というメンバーで、日本語の訓練になるようにという配慮からこうなったようです。一番苦労したのは、お風呂です。共同のお風呂にはなかなか馴染めず、なるべく他の人たちがいないときに入ってしまうと工夫しました。寮生活では、門限ぎりぎりに滑り込んだり、自治会のメンバーとして活動したり、不審者が忍び込んできて怖い思いをしたり様々な体験をしましたが、今思い返すといい思い出ですね。寮で同じ部屋だった方々とは、今でも交流があります。（写真1,2）

大学で教育行政を学び、日本で生活することで、ラオスの教育のあり方・教師のあり方について深く考えさせられました。日本の現状を見て、今のラオスに必要なことを見つけ、ラオス

の教育を変えて行きたいという気持ちは、以前より強く、明確になっていました。とりわけ強く必要性を感じたのは、ラオスの子どもたちがラオス語を読めるように文字を覚え、二度と忘れないように、ラオス語の本を作ることでした。当時は大学での勉強を終えたらラオスに戻るつもりでいたので、お茶大で学んだ時期には日本の教員免許をとりませんでした。今思えば、日本で教育実習をし、教育の現場について学んでおけば、ラオスに戻るとしても貴重な体験だったはずなのですが…

わたしにできること

大学4年生のときに日本人と結婚しました。相手は、お茶大で学んでいたベトナムからの留学生の先輩がお世話になっていた、ホストファミリーの息子さんです。先輩から、やさしいお父さん・お母さんだから遊びに行こう、と誘われ、留学生たち何人かで遊びに行っでご飯をごちそうになったり、一緒に遊んだりしていたのがきっかけです。修士2年のときに子どもができてからは、子どもを保育所に預けて大学に通いました。子どもができてよくわかったことなのですが、子どもというのは本が好きで、字が読めなくても読み聞かせてあげるととても喜んでくれるのです。大学での勉強が終わったらラオスに帰るつもりだったのに、結婚して子どもができ、簡単にはラオスに戻れなくなってしまいました。ラオスに戻ったら国のために教育の分野で働くつもりでいたのに、その実現が難しくなってしまったのです。子育てをしながら、ラオスに戻れない自分に何ができるのかと考えたときに、民間の立場からラオスへ絵本を送ることを思いつきました。当初は、わたしと夫、そして夫の友人という、4～5人のメンバーで活動をしていました。絵本は幼稚園のバザーで残ったものをいただき、種類が色々だったことからラオス語の訳は付けず、絵が

中心のものを選び、日本語のまま送っていました。活動費用はそれぞれのポケットマネーから負担していました。

ラオス語の絵本を作ろう!

1987年頃にラオスで教育施設を回っていたときのこと、わたしたちが送った絵本の中の日本語を指さして、「おばちゃん、これなんてかいてあるの?」と子どもが聞くのです。絵であろうと文字であろうと、子どもは描かれているものに興味を持つのです。ラオス語の絵本の必要性を強く感じたのは、その出来事がきっかけでした。とはいえ、それまでのラオスには文章に挿絵

が添えられているものはあっても、ラオス人によるラオス語の絵本というものは存在しませんでした。

ラオスの作家たちは、絵本というものを作ったことがなかったのです。

そこで、日本の絵本作家の方々にラオスへ行ってもらい、ボランティアで絵本の作り方を講習してもらうことにしました。1995年のことです。講師として、『こぐまちゃん』シリーズで有名なわかやまけんさん、造形作家のやべみつのりさんが参加してくれました。研修当日、作家としてのプライドからか、ラオスの作家たちは誰ひとり参加してく

れませんでした。蓋を開けてみれば、教育の現場にいる教師たち、絵を描くことを職業としている人たち中心の講習会になりました。

わかやまさんから、絵本としてはどういう内容のものを作るのが良いのかアドバイスをもらい、絵が描けない人たちは切り紙絵を作ること、参加者全員で実際に絵本を作りました。ラオスには色紙がなかったため、日本からクラフト紙を持って行き、絵本の印刷は、日本人の専門家が長年指導していたタイの印刷所で行いました。このとき作成した絵本は、『文字絵本第1～3巻』シリーズとして、増刷を重ね、無料でラオスの学校に送りました。(写真3)



写真3 絵本



写真2 お茶大の謝恩会にて上野先生と



写真4 教員セミナー



写真5 教員セミナー

さあ読もう!

ラオスに絵本や本を送るようになって、しばらくの間、送られた本は大事にしまわれているだけでした。というのも、先生自身もあまり本を読んだ経験がないため、本を読むことの大切さが理解できず、子どもたちへも勧めていなかったようです。これではいけないと、本を学校に配布する前に、先生を集めて司書の仕事や子どもたちが本を読むための指導をすることにしました。わたしたちのこの活動が評価され、2007年10月からは、そうした指導が教員養成学校のカリキュラムの中に組み込まれることになっています。わたしたちの時代と比べ、ラオスの教育も変わりつつあります。今後は教員養成学校のセミナーとして、ラオス人のスタッフが自力でこうした教育を行えることになると思います。(写真4,5)

子どもが自己表現できるように

1994年から、日本の児童館をヒントにしてラオスに「子ども文化センター」(CCC)を作るための支援を始めました。ラオスでは、子どもは自分のことをする時間などなく、親の手伝いをするのが当たり前でした。そうではなくて、子どもたちが自分の好きなことができるように考えたのが支援を始めたきっかけです。わたしたちの会が支援したのは9カ所だけですが、現在ではこの試みが全国規模になりつつあります。CCCには、学校があるときには土日や休日に、夏休みには毎日のようにたくさんの子どもたちが集まり、好きな本を読んだり、伝統舞踊や音楽、お絵描き、彫刻、織物などを学んでいます。ただ、来賓があるときには歓迎会で子どもたちに踊らせる等、子どもたちのために考えたことが大人に利用されている点が気になります。そこで、2007年3月に、ラオス全土のCCCのスタッフを集めて、CCCは子どもたちが色々な形で自己表現できるように支援する場所であるという当初の趣旨を再確認するためのセミナーを開きました。現在、CCCと日本との交流という点では、日本の大学生が夏休みにボランティアでラオスへ出向き、CCCで子どもたちと遊んだり、様々な事を伝えたりしています。(写



写真6 日本の児童館をヒントにした子ども文化センター

真6,7)

「子どものため」は「親のため」

こうした活動は、子どもへの教育の大切さを考えてのことですが、活動を続けるうちに、子どもの教育には親の理解が欠かせないということを強く感じました。特に、父親の収入が少ないため、生活苦から子どもを学校に通わせないという実状がありましたから、母親の現金収入が必要だと思いました。そういうわけで、1991年からラオスの女性に職業支援をする活動を始めました。当初は、日本で売ったラオスの布や民芸品の売り上げ金で、孤児院の子どもたちの寮にお手洗いを作ったり、孤児院や農村の女の子たちのための織物技術の研修費を負担したり、彼女たちのために織物工房をつくったりしました。さらに、子どもへの教育の充実と親の生活の安定、そして女性たちの自立ということを考えたとき、ラオスの伝統的な織物を本格的に仕事にできれば、という発想が浮かびました。こうして、1998年に女性たちのための職業訓練センターを設立しました。まず研修センターの建物を三棟作りましたが、これは1997年に横浜のシルク博物館でラオスの織物を販売したときの売り上げによるものです。その後、JICAからの支援もあり、現在では織物工房や寮も整備されています。研修センターでは、ラオス全土の女性たちに対して自然染色や織物、縫製の研修が行われ、工房では織物が販売されています。最近では、国際NGOからの依頼で、他の国からの利用もある国際的なものになっています。センターで学んだ研修員や、そこで働く織子や縫製に取り組む女性たちは、未だ結婚していない人もいますが、働いたお金を貯めて、兄弟を高校や大学に行かせているところを見ると、彼女たちが母親になった時には、きっと自分の子どもを学校に行かせてくれるという確信が持てるのが、何より嬉しいことです。(写真8,9)

理想の学校作り

ラオスの伝統的な織物に着目したのは、子どもの教育レベルを向上させるためだけでなく、ラオスの文化を紹介することで、



写真7 子ども文化センターでは伝統舞踊の指導も



写真8

ラオスの女性たちやラオスの人々に、自分たちの文化に自信を持ってもらいたいと考えたからです。わたしの大きな夢のひとつは、職業訓練センターの隣に民族博物館をすることです。社会教育の一環として、ラオスの多様な民族の文化を紹介するために、博物館を建てたいのです。そして、もう一つの大きな夢—これは生涯の目標ですが—は、ラオスに学校をすることです。1992年に、日本青年会議所から TOYP 賞をいただき、そのときの賞金 30 万円を、学校を作るための土地を買う資金の一部にしました。職業訓練センターも、その一画に建てられています。教育が良くならなければ世の中は変わらないということを感じています。ラオスは、わたしが暮らしていた時代と比べて大きな変貌を遂げており、自由経済体制へ移行し、お金儲けのための技術を身に付けることだけに躍起になる人が増え、社会の格差も広がっています。自分の生活レベルさえ上がればそれでよいのでしょうか。わたしは自分が作る学校の教育方針として、まずは自分たちのアイデンティティを見つめること、そして、ボランティア精神のある子どもを育てること、農村開発に感心を持つ子どもを育てること、将来農村開発スタッフや地方の教師として活躍する人材を育てることを大きな目標にしています。そして、できれば幼稚園から大学までの一貫教育を行いたいと考えています。また、ラオスでは、少数民族に対する教育の機会がまだ少ないというのが実情です。だからこそ、彼らにも教育を受ける機会を作り、自分たちの村や地域の問題にきちんと取り組むような人材を育てたいと思っています。自分たちのアイデンティティを守り、自分の生まれ育った土地のために活躍してほしいのです。

🌸 祖国への思い 🌸

わたしが希望通りフランスに留学していたら、今の生活はなかったでしょうね。ラオスからフランスに留学した多くの人たちは、ラオスに戻らず、フランスに留まっています。フランスはラオスから遠く離れているため、ラオスの情報が適切に入手できないうえ、社会主義というラオスの体制とフランスの社会との違いから、帰りたがらないのです。わたしは祖国を離れ、日



ラオスの伝統的な織物



写真9 職業訓練センターの工房にて

本で生活しています。それでも、日本とラオスが地理的に近いお陰で、ラオスのことを考え続けられたのではと思っています。ラオスに学校を作ったら生活のベースの半分はラオスに移さなくてはならないでしょう。きちんとした理念のもと、わたしがいなくても学校が続いて行くように、教育の大切さを理解できる後継者を育てたい、それがこれからの人生で必ず実現したい夢であり、最大の目標です。

チャンタソンさんは、翌日のラオス行きを控えているにも関わらず、インタビューに丁寧に応じて下さいました。ラオスの織物をまとい、微笑みながら、しっかりとこれからの夢を語るチャンタソンさんのお話に聞き入っているうちに、あっという間に時間が過ぎていきました。わたしの普通の生活で、「国のため」という発想は馴染みのないものですが、祖国を思うチャンタソンさんの熱心さ、そしてその行動力には圧倒されました。何より、これだけの活動をあきらめずに継続してこられた点に脱帽です。次回のエリプスでは、チャンタソンさんの生涯の夢である学校をつくること、「ラオスのこども」創立 25 周年での記念式典のこと等について、ご紹介したいと思います。ご期待下さい。

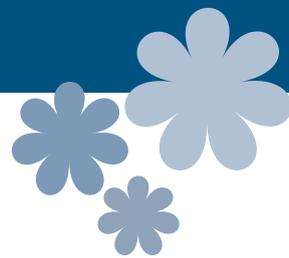


〈チャンタソンさんプロフィール〉



- 1953年 ラオス・ヴィエンチャン市に生まれる。
- 1974年 日本の文部省奨学金により、日本に留学
- 1975年 お茶の水女子大学入学
- 1979年～2005年 外務省研修所でラオス語講師を勤める。
- 1981年 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士
- 1982年 「ラオスのこども」設立
- 1986年 東京都立大学大学院人文科学研究博士課程修了
- 1987年～1991年 恵泉女子学園短期大学非常勤講師「アジア社会文化」担当
- 1990年 ラオス語の絵本を作るため計画を立てる
- 1991年 「ラオスの女性とともに仕事をつくる会」設立
- 1991年～1993年 和光大学非常勤講師「アジア社会文化」担当
- 日本青年会議所 TOYP 賞 '92 受賞
- 1993年～1994年 東京外国語大学非常勤講師「ラオス事情」担当
- 1994年～ ラオスの「子ども文化センター」設立のための支援
- 1998年 ホアイホン職業訓練センター設立
- 1998年 『ラオス語入門』（大学書林、共著）出版
- 1999年 毎日新聞国際交流賞 受賞
- 1999年～2005年 東京外国語大学非常勤講師「ラオス語」担当
- 2000年 アジア人権基金「女性・人権特別賞」
- 2006年 『ラオスの布を楽しむ』（アートダイジェスト）出版

職業:大学3年生のときから、フリーのラオス語翻訳・通訳、ラオスに関する様々な分野(社会、教育、女性問題、食文化(ラオス料理教室)など)のフリーランス講師として活躍中。



イベント情報

講演会のご案内

お茶の水女子大学きっての人気教授 土屋賢二先生の講演会が開催されます。皆様ふるってご参加ください！

主催 お茶の水地理学会

共催 お茶の水学術事業会

「われ思う、ゆえにわれ悩む」

土屋 賢二 先生

お茶の水女子大学 文教育学部教授

日時 2007年12月15日(土) 14:00～16:00 (参加無料)

場所 お茶の水女子大学 本館306

申し込み方法 ハガキ、FAX、Emailのいずれかで下記まで
 ＊保育(実費)ご希望の方は必ずお書き下さい
 〒112-8610 文京区大塚2-1-1
 お茶の水女子大学 文教育学部地理学教室
 FAX 03-5978-5185
 Email chiriog@yahoo.co.jp

締め切り 11月15日(応募者多数の場合は抽選、ハガキで参加の可否を連絡します。)

女子高校生のためのサイエンスフェスティバル

日時 10月27日(土) 13:00～17:00

場所 お茶の水女子大学 徽音堂

五女子大学共催イベント

(お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学)

『未来が求める、 科学(しなやか)な感性』

- ★脳科学者 茂木健一郎先生の講演
- ★多彩な分野で活躍する理系出身者によるパネルディスカッション
- ★相談コーナー

詳細・お申し込みは

<http://www.ocha.ac.jp/shinayaka/index.html> をご覧下さい。

お問合せ先：お茶の水女子大学女性研究者支援プロジェクト
 <COSMOS> 推進室・情報バンク Tel/fax 03-5978-5520

cha cha cha
 茶・茶・茶 お茶大再発見!

科学史散歩 9

女性数学者の草分け 森本 治枝 (1902～1995)

女性は、料理・裁縫・琴・三味線ができて、夫の言うことにハイ、ハイと従うのがよいと言われた時代に、自分の好きなことをひたむきに追い求め、女性数学者の草分け的存在となった森本治枝をご紹介します。

治枝は、1902年、大阪府曾根崎町に三人姉妹の長女として生まれました。清水谷高女を卒業後、「早く結婚して森本家を継いでほしい」という父親を説得し、1918年に東京女高師理科に進学しました。経済的に恵まれていた治枝は、理科物理専科生となり、東大の佐野静雄教授、東北大の愛知敬一教授ら当時の物理の最高権威に可愛がられる一方で、複数の外国語の教室にも通っていました。4年生の時には、来日したアインシュタインにドイツ語で挨拶をして握手をする機会に恵まれ、物理への思いはますます強くなりました。

そんな治枝が数学者への道を歩み始めたのは1923年、21歳の時でした。周囲の強い勧めにより、東北帝国大学の物理科を受験することにしたのですが、女子の志願者が他におらず、二人一組で暗室実験をする際に男女が組むのはよくないという理由で、試験前日に急きょ数学科に変更するこ

とになったのです。入学後も、独身の男子学生からノートを借りたことを教授に叱られるなど、今では考えられないような苦労がありましたが、数学からギリシャ語、ラテン語まで、幅広く勉強しました。同じ数学科で助手をしていた深沢清吾に見初められ、1927年に大学を卒業すると結婚。その後は、数学の勉強を続ける一方で、多くの女学校・専門学校の教壇に立ちました。後に「教育の実をあげる第一歩は、まず生徒に好かれること」と述べている通り、帝大出身の治枝に憧れて、幾何や物理の勉強を頑張る生徒がたくさんいたそうです。そんな母親の影響を受けてか、4人の息子達は全員大学教授になっています。

晩年の口癖は、「何か面白いことない?」。明治から平成にかけて社会や価値観がめまぐるしく変化するなかで、大らかで前向きな気持ちを常に持ち続けた人でした。死後出版された自伝『ある女性数学者の回想』は、治枝の人柄とともに当時の女学生の様子を生き生きと伝えて、興味深い一冊です。

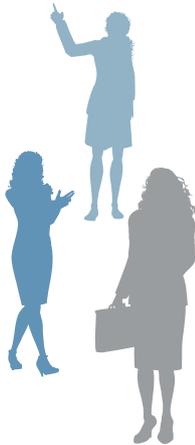


女性のための起業入門セミナーの予告

2008年3月1,2日に、文京シビックセンター(東京都文京区役所内)で「女性のための起業入門セミナー」を開催します。

起業事例の紹介や事業計画の立てかた、グループワークなど、効率的にスキルを身につけるセミナーで、講師は、お茶の水女子大学附属高校出身の上條茉莉子さんです。日本IBMに勤務後、独立し起業、各自治体で女性の起業家支援を積極的に行っています。

昨年も、文京区で「売れるスキルを身につけよう!~就職・起業にむけて~」を開催しています。詳細は次号(2008年1月号)に掲載しますので、再就職をお考えの方、NPO法人化や起業に関心のある方など、ふるってご参加ください!



講師斡旋について

ご希望に合わせて講演会やセミナーに最適な講師を斡旋します。自治体主催の市民講座や講演会など、講師のご要望がありましたら、お気軽にお問合せください。

◆地方講演会共催のパートナーを募集◆

東京都以外の地域での講演会を共催していただける団体等がございましたら、ぜひ、ご連絡ください。

TEL&FAX : 03-5976-1478

E-mail : info@npo-ochanomizu.org



お茶の水ブックレット

お茶大で催されるさまざまな講演やシンポジウムの内容を学外のみなさまにお届けするために、お茶の水ブックレットを出版しています。大学が発信する新鮮で貴重な情報を、お仕事や日常にどうぞお役立てください。



第1号「教育と平和—アフガニスタン女子教育支援シンポジウムから」
緒方貞子氏へのお茶の水女子大学名誉博士称号授与式での記念講演・五女子大学学長によるアフガニスタン女子教育支援パネルディスカッション。

第2号「国立大学改革とお茶の水女子大学のゆくえ」
本田和子前学長の講演(表題)、土屋賢二教授の講演「お茶の水女子大学はどんな人間を生み出してきたか…被害者の立場から」を収録。

第3号「ライフワールド・ウオッチセンター」(在庫なし)
センター設立記念シンポジウムでの記念講演を収録。名古屋市大名誉教授 伊東信行氏、文科省 井上正幸氏、日本学会会議会長 黒川清氏 他

第4号「生命科学フォーラム」
お茶大理学部研究者による生命科学最先端の講演集。「ストレス応答の生物学」「ゲノム解析…遺伝子診断と治療の扉」「糖鎖を操作して健康を守る」「インピボ核磁気共鳴…診断と治療への寄与」他

1冊500円(税込・送料別)でお求めいただけます。
メール・電話・FAXでご注文ください。

TEL&FAX 03-5976-1478

info@npo-ochanomizu.org

<http://www.npo-ochanomizu.org/booklet/>

最新刊については随時ホームページで
お知らせしております。

第5号「現代女性の恋愛・結婚・就労パズル」
「読売・お茶大 女性アカデミア21」での講演とシンポジウムを収録。心理学者で評論家の小倉千加子氏の講演(表題)とパネルディスカッション。

第6号「『女性と科学』を科学する」
「読売・お茶大 女性アカデミア21」より、宇宙飛行士 毛利衛氏と評論家 樋口恵子氏との対談、(株)リコー常務執行役員 國井秀子氏、サイエンスライター 青山聖子氏、お茶大理学部教授らによるパネルディスカッションを収録。

第7号「家族と犯罪に近い者の憎悪はなぜ?」
「読売・お茶大 女性アカデミア21」より、ノンフィクション作家の久田 恵氏による講演、宮本みち子氏(青年社会学・家族社会学)とお茶大教授らによるパネルディスカッションを収録。家族の犯罪、DV、ひきこもり、家庭と法律との関係などについて語る。

ヤマザキ



”おいしい食パン“って、
こういうことなんです。

特撰
超芳醇

Creating Process
教育コンサルティング

高校生の進路をサポートしています
<http://www.creatingprocess.com/>

創業1999年 帰国高校生専門の学力養成機関

生徒募集

- 帰国子女教育の指導法を応用
- 極少数制の個に応じた指導

ご相談随時、要予約
年間受講者数限定

大学受験指導・帰国高校生教育・海外子女教育・キャリアコンサルティング

科目 英語・国語・日本史・世界史・小論文
形式 個別(1対1)・グループ(1対4)・講座(1対8)



塾長 三原 由起子

大学院人文科学研究科(日本文学)1982年修了
大学院人間文化研究科(比較文化)1989年単位取得
旧文部省帰国子女指導者講習修了
元成蹊高校・東京学芸大学附属高校教諭

詳細お問合せ先

登録講師募集

詳しくはホームページ右下をご覧ください

(南)クリエイティングコミュニケーションズ
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷4-3-1-603
Tel: 03-5772-2737 Fax: 03-5772-2738
E-mail: mihara@creating-c.com

いじめから子供を守ろう!ネットワーク

いじめ相談窓口 03-5750-0779



ブログ <http://blog.mamoro.org>
メール kodomo@mamoro.org

「いじめ」から子どもたちを救うためのNPO活動をしています

「お茶大ゴーフル」はご賞味いただけましたでしょうか?
お土産に、記念に、会合にぜひお買い求め下さい。
お茶の水女子大学生協で店頭販売しています。

お茶大ゴーフル 好評発売中!



ばにら・ちよこ・いちご 各4枚入 600円(税込)

通信販売いたします

※送料はお客様負担となります。

ご注文はメール・電話・FAXでどうぞ!

E-mail: info@npo-ochanomizu.org TEL&FAX: 03-5976-1478

●発送も承りますので、お茶の水学術事業会事務局までお申込みください。

編集後記

チャンタソンさんの活動は、とても多彩で影響力があります。これだけのことを行うには、多くの賛同者と協力者が必要ならず。理想を掲げ、人々の共感を得て実現していくプロセスにも幾多のドラマが詰まっていることでしょう。まだまだ伺いたいことがいっぱいです。次回もお楽しみに!

広告募集

このページに広告を掲載しませんか?次号は1月、約3,000部発行、広告料金は20,000円/回、会員の皆様をはじめ全国の公共機関などに送付します。ブックレットの広告も募集しております。詳しくは事務局へお問合せください。

事務局

OPEN 月~金 10:00 ~ 16:00

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学 理学部 3号館 204
TEL&FAX 03-5976-1478 E-mail: info@npo-ochanomizu.org
<http://www.npo-ochanomizu.org>

※会員の方は、お問合せの際、会員番号をお知らせください。会員番号は封筒の宛名ラベルに印字してあります。



◆事務局所在地
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
理学部3号館204

◆交通機関

地下鉄 丸の内線
茗荷谷駅から徒歩7分

地下鉄 有楽町線
護国寺駅から徒歩8分

都バス
大塚2丁目バス停すぐ